

第 2 回小委員会（平成 25 年 2 月 12 日）の論点整理

検討まとめのイメージ

はじめに

(1) 目指す社会のイメージについて

- ・「持続可能な社会」の定義やビジョンをつくるのが難関だが、すでに県では「持続可能な滋賀社会ビジョン」を作成している。このビジョンを基に環境学習のあり方の検討を行ってはどうか。滋賀社会ビジョンや環境総合計画は「低炭素社会の実現」と「琵琶湖環境の再生」を二本柱としていることから、これを環境学習においても目指すべき社会像としてはどうか。

(2) 環境学習の到達点について

- ・環境教育といっても、ある程度、その到達目標がいるのではないか。低炭素社会の実現と琵琶湖環境の再生という2つの大きなビジョンに向けた、環境学習の結果として具体的な実践活動を目標と捉えてもいいのではないか。

環境学習のめざすもの

(3) 目標達成のための手段について

- ・人を育てることが教育の目的であることから、これからの環境教育、環境学習が目指す目標というのは、持続可能な社会づくりを推進する人材を育てるということ。「つながり」や「直接体験」はそういった人材育成するという目標を達成するための手段である。

環境学習で何が大切か

(4) つながりというキーワードについて

- ・つながりというキーワードについて、まず場をつないで、その中で人と人をつなぐ。また、課題、あるいは問題をつないでいく。そして主体をつなぎながら、そうした持続可能な社会づくりを推進する人材を育て、そして行動を支えていくというイメージ。

(5) 地域に着目すること

- ・地域への誇りや愛着を持って生きていける基盤をつくるということも、環境学習の中では非常に大切な要素。
- ・環境学習を考えるときに、暮らしている一人一人の県民（の意識）が変わって、社会をつくっていくというところはどうやってアプローチをしていくのかというところを常に考えないといけない。
- ・地域のお年寄りが専門的な知識以上の経験を持っている場合がある。リーダー的なことができる人を発掘することで、課題解決につながることがある。

環境学習を推進するために / 各主体の役割

(6) 環境教育と環境学習の言葉の整理について

- ・教育という言葉には教える者と教えられる者という関係性があるのに対して、学習というのはあくまで水平的な中での学びあいや教えあいであり、小委員会で考えたいのは「環境学習」。

(7) 学校への支援

- ・学校への支援において、支援者との「つなぎ役」がどう機能するか。支援拠点はあがあるが、活用がなかなかしにくい。コーディネーターはいるが、基本的には待ちの姿勢であり、主体間をつなぐ最初の第一歩に工夫が必要。

(8) 各主体の役割について

- ・滋賀県内で積極的に持続可能な社会づくりを進める市町、地域コミュニティ、学校を環境学習拠点とし、その活動が全県にいきわたるためのコーディネートを滋賀県ができないか。
- ・各主体の役割の中で、いろんな主体でつながることが重要。県レベルと市町レベルでそれぞれの役割がある。

第2回小委員会での主な意見

第2回小委員会資料（検討まとめのイメージ）より

はじめに

なぜ今検討する必要があるのか

琵琶湖との
共生

琵琶湖をはじめとする滋賀の豊かな自然環境を孫子の世代にまで引き継いでいく使命がある。

目指す社会の
イメージ

滋賀の環境と生態系が健全に保たれ、環境への負荷の少ない健全な経済の発展を図りながら、県民すべての生活の質の向上が図られている「豊か」で「安全・安心」な「持続可能」社会。

環境学習の
あり方検討の
意義

環境教育等促進法の施行、県内外の社会状況の変化を踏まえて、滋賀県における今後の環境学習のあり方について検討する必要がある。

【意見】

- ・「持続可能な社会」の定義やビジョンをつくるのがまずもって一番の難関ですが、すでに滋賀は作っています。もちろんこれを実現するのは難しいですが、このビジョンを基に、環境学習を通して、人づくり、地域づくりを行うべきなのではと思います。（吉積委員）
- ・環境教育というと、ある程度その到達目標が要るのではないかという感じがするんですね。
- ・たとえ環境学習といっても、このことをやって何が解決するのかという課題の抽出があって、最後にこの解決がなされているかというところが、ここではちょっと。そのところが見えなかったから、自分の中にあまり入ってこなかったのかな。（歌代委員）
- ・滋賀県の場合はせっかく滋賀社会ビジョンというのが既にできているのであるから、持続可能社会を目指した環境学習のあり方を考えるのであれば、それをベースとしてのビジョンとして掲げてはどうか指摘されているのはそのとおり。
- ・具体的には、このまとめイメージの1ページの「はじめに」というところの上が「琵琶湖との共生」と「目指す社会のイメージ」とあるんですが、滋賀社会ビジョン、あるいは、今の県の環境総合計画は低炭素社会の実現と琵琶湖環境の再生を二本柱としています。たぶんあと10年ぐらいは、この二本柱でいこうと思います。これをこの「はじめに」というところにドンと据えてしまってはどうでしょうか。
- ・二つのビジョンの到達に向けた人材育成、あるいは、より実践につながるような学習という意味で、着地点を考えていければ、もう少し、ESDの枠組みにより近いイメージになるのではないかと。（井手委員長）

・「琵琶湖との共生」というところに、「琵琶湖をはじめとする滋賀の豊かな自然環境を孫子の世代にまで引き継いでいく」というふうにあるんですけども、おそらく自然環境を引き継いでいくということだけではなくて、そこに暮らす人たちの恵み豊かな暮らしを引き継いでいくんだという概念がないと、環境を守るために何をするのかというところから抜け出せない気がするんですね。

・実際に今目指すものとか施策の中でも、日常性とか暮らしということがきちんと書かれているので、そういった概念をきちんとイメージのほうにも入れていくべきではないかというふうに思います。

(菊池委員)

・マザーレイクのほうでも、琵琶湖環境の再生として、その中には「暮らしと湖の関わりの再生」という目標を掲げています。そういった暮らしであるとか、そういったところをイメージしたような目標が必要だというご指摘だというふうに思っています。

・「低炭素社会の実現」については、個々でできることを、ある程度イメージしやすい。しかし、琵琶湖環境の再生となると、低炭素社会の実現に並べたときに、こちらのほうに何があるかという、実は今の時代、非常に見えにくいようになっている。

・ただ、だからこそ、今の時代にできる地球、低炭素社会実現に向けた個々の実践活動に対応する活動として思いますが、一つは、前回も申し上げました環境こだわり農産物の購入でありますとか、あるいはペットボトルのようなものを極力買わないようにしましょうでありますとか、要はそういうことになるのかなど。

・せっかく持続可能ということで、滋賀社会ビジョンを基に据えるのであれば、環境学習の結果としての実践というところに、それぞれの大きな二つの目標に対応するような具体的な実践活動がある程度見据えてもいいんじゃないか。

(井手委員長)

第2回小委員会資料(検討まとめのイメージ)より

環境学習のめざすもの

全体を貫くキーコンセプトは何か

< 目標 >

持続可能社会
づくりに向け
て主体的に行
動「実践」

琵琶湖を守ろうと立ち上がった県民運動の原点に立ち返り、持続可能社会づくりのために解決すべき環境課題を自分ごととして捉え、普段の消費行動など身近なことから持続可能な社会を意識した行動が重要。

「つながり」
を意識し、深
める

私たちが自然の生態系の中で生きていることを理解し、人と人との絆や、人と自然、人と社会とのつながりを深めていく必要がある。持続可能な社会づくりに向けた行動により、様々なつながりを理解し、深めることで、そのつながりが学びにつながっていく。

【意見】

- ・環境学習、学習、教育というのは人づくりですから、人を育てることがまさに教育の大きな目的であるということを考えれば、これからの環境教育、環境学習が目指す目標というのは、持続可能な社会づくりを推進する人材を育てることが、結局は大きな目標ということですね。
- ・問題は、その次に並列して、つながりということが書かれているんだけど、このつながりというのは、そういった人材育成するため、その目標を達成するためのこれは手段ですよね。つながりを意識したりとか、直接体験をふんだんに取り入れることを通して、持続可能な社会づくりというものを積極的に推進していく、そういう人を育てていきたいと思いますので、目標としては、そういう人を育てていくということを一目標として定めて、つながりというのは、ここでは必要ないのかなというふうに思います。 (神部委員)
- ・1ページ目の環境学習の目指すものについて、現在目標として、実践とつながりが挙がっていますが、これはおっしゃるとおり、ここで言っている目標というのはむしろ手段のようなものであって、最終的には持続可能な社会実現に向けた人材の育成というのが、やはり直接的な目標になるのかと。
- ・人が人として主体的にあるということとは別次元で、人と人とがつながって緩やかなネットワークができること自体が社会全体として、ある意味、大きな有機的な、何というんですか、力につながっていくというのが私のソーシャルキャピタルの理解。 (井手委員長)

第2回小委員会資料(検討まとめのイメージ)より



持続可能な社会づくりのための環境学習

ESDの枠組みの中で環境学習を捉え直した考え方で、学びに「実践」と「つながり」の視点を意識するもの。

【意見】

- ・ESDという概念は難しいんですが、ただ実際問題、中身をよく見てみると、きちっとしたESDの枠組みでやられているような活動がいっぱいあると。そこをきちっと紹介していくようなことをESD関係ではよくやられています。おそらく滋賀県の中でも、探してみれば、「あれっ、これもESDと呼べるんじゃないか」という環境学習的なプログラムがいっぱいあると思うんです。ですから、そういったところをきちっと、把握して、他の皆さんに紹介していく、そういった試みというものも大事なかなという気がしております。 (井手委員長)

環境学習で何が大切か

環境学習を進めるにあたり何が大切か

基本的な考え方（理念）	つながり	実践の視点
体系的、総合的に 行われること	学び・ 世代を つなぐ	幼児教育 学校教育 社会教育 環境学習 地域での実践 地域課題を体験 学びに実感 人と人とのつながり 実践
身近なところで 行われること	場を つなぐ	衣、食、住など生活等身近な場で実践 学び ライフスタイルの変革 消費行動 地球規模のつながりを意識 ライフスタイルの変革
協働が重視されて 行われること	主体を つなぐ	交流 課題の共有 協働 つながりの深化 地域で定着 各主体のつながり 環境人材を生かす場や機会の広がり

【意見】

- ・つながりの中で三つ、つながりが挙がっているんですけども、「学び・世代をつなぐ」と「場をつなぐ」というものの中身が少し重複しています。この場づくりというのは、結局学びの場づくりということだろうと思いますので、学びの部分、学び世代をつなぐということと場をつなぐということとの中身、実践は非常に重複している部分が多くなると思います。
- ・また、世代という言葉が微妙で、ここだけで見れば、たぶん子ども、大人という世代間交流ということなんでしょうけども、環境教育や環境学習で世代で捉えるときには、もう少し広いですね。世代間公正や世代内公正とか。特にESDの場合は、世代間公正といった、大きな意味で使われることのほうが、むしろ一般的ということを見ると、世代という言葉の使い方というのを明確にしておかないと、何を意味しているのかというのが少し分かりづらい気がします。
- ・一つは場づくり。これはまさに環境学習を進めていく上で、家庭、地域、学校、そういったあらゆる場で、環境学習のプログラムを提供しつつ、またそれが相互に連携しながら、まさに全体として総合的にそうした環境学習を進めていく場づくりを行う。
- ・もう一つ、これから僕の中で大切にしていこう扱いになるのは人をつなぐ、人と人とのつながり、そこを重視すべき場がある。まさに今言ったように人をつなぐ。世代内の中での人と人とのつながりであるとか、今の世代と次の世代の人とのつながりというものをどれだけ意識できるかということによって、その行動、意識は変わってきますからね。
- ・それだけではなくて、まさに人と人を学びの中でも、個の学びを、僕は具体的な行動というところまで学びを結び付けていくためには、やはり以前にも言いました、人と人との仲間づくり、人間関係は非常に大きいと思います。知識を持って、それで詳しく学んだから、即それが行動に結び付くわけではなくて、その間にはそういう仲間がいて、グループがいて、そういう人たちとの交流の中で、その学んだ知識というものが自然なかたちで具体的な行動に結び付いていくということのほうが多くて、そういう意味でも人と人をつなぐというのは、環境学習が具体的な行動を伴う学びであるならば、とても重視しなくてはならないつながりだと思います。

- ・特にESDということを考えるのであれば、環境問題だけではなくて、経済の問題であるとか、文化の問題であるとか、そういったさまざまな課題であり、問題をどうつなぎながら、それを含めて環境問題ということを考えていくのかということが大切だと思います。
- ・そして最後に主体。NPOとか、学校であるとか、メディアであるとか、企業であるとか、そういうところが協働しながら具体的な行動へとそれを進めていくことが必要だと思います。僕なりに聞きながら整理するならば、まず場をつないで、その中で人と人をつなぐ。また、課題、あるいは問題をつないでいく。そして最終的に主体をつなぎながら、そうした持続可能な社会づくりを推進する人材を育て、そして行動というものを支え支援していく、この四つのイメージ。 (神部委員)
- ・環境学習を考えると、一人一人暮らしている県民の方たちが変わって、社会をつくっていくというところでどうやってアプローチをしていくのかというところを常に考えないといけないと思います。人材育成をして、その人に教えてもらってプログラムをやりましたというところまではできるんですけど、今回このデータ集を拝見していても、その結果、皆さんがどう受け止められているのか、どういう効果が出たのかというところが実は一番関心があるんですけど、なかなかそれを見えるかたちで皆さんに共有する仕組みがつかれない。この壁をどうやって乗り越えていけるのかなということを改めて考えていきたいなというふうに思っています。
- ・人間活動がすごく負荷を与えているという前提で削減をしていこうということは非常に大事なことですけど、一方で、その地域への誇りとか愛着というものを持って、誇りを持って生きていける基盤をつくるということも、環境学習の中では非常に大切な要素だと思います。伝え方の問題になると思うんですけども、そういった概念をしっかりと含んで、これからの未来をどうしていくのかということを考えていければというふうに個人的に思いました。 (菊池委員)
- ・ある意味キーワードとしては、地域からというふうに聞かせていただきました。そうですね。改めて今のイメージ図のところ、地域のところをもう少し、強調したほうがいいかもしれませんね。一応「地域での実践」とか、「地域課題にも」とは書かれているんですが、もう少し具体的に地域課題の解決や、地域での実践、地域での学習、地域でのリーダー育成ということを考えるべきかと。 (井手委員長)
- ・一回自然を見る目を失ってしまった子どもが湖岸に生えてくる植物を見るのは、庭に雑草が生えてきたということと感覚的にほとんど変わらないんですね。
- ・ですけれども、そこに自分が実際にビオトープで育てた植物を植え付けに行くことによって、そこにも愛着が生まれれば、その自然再生を価値があるものだと思って、未来に向けてそこを大切にしてくれる心が育まれるだろうということで (菊池委員)
- ・持続可能社会というのはイメージしにくいので、何かそういうイメージしやすいようなストーリーができるといいなと思います。 (井手委員長)

環境学習を推進するために（具体的事項）

学びの場

どうすれば
体験・実践の
機会や場が
充実するか

教える人

どうすれば
指導者が増
え、活躍で
きるか

学ぶ人

どうすれば
普段から行
動してもら
えるのか

つなぎ役

どう拠点機能
を充実するか。
学校への支援
をどうするか

【意見】

- ・「学びの場・教える人・学ぶ人・つなぎ役」とあります。私の認識では、環境教育と環境学習の違いで、環境教育は教える人がいて学ぶ人がいるかもしれませんが、環境学習はそのような一方向だけではなく、相互学習を重視しているところがあるかと思います。ですので、資料の中で、「教える人」と「学ぶ人」と分けて書いていることに、若干、違和感を感じました。例えば、これ、推進する人みたいなかたちでまとめてもいいのではないかなと若干思いました。（吉積委員）
- ・学校なんていうのをある主体として取り上げるわけですから、今の環境教育というのは、教える人がいて学ぶ人がいる。そういう場だから、学習というのは相互に学習するものであって、教える人も学ぶ人もいない。全員が教える人であって学ぶ人だということをおっしゃいましたけど、そういう捉え方でいいのかな、どうかなと。（歌代委員）
- ・教育といたらどうしても教える者と教えられる者という関係性があるのに対して、学習というのはあくまで水平的な中で学び合うとか、そういうことなんだろうというふうに思っていて、イメージとして、この委員会で考えたいのは、まさに環境学習の今後についてだろうと思っております。（井手委員長）
- ・一つ思うのは、学習イコール学び合い、教え合いというふうに言ってしまうのもいかなものか
- ・学びというのは自己学習、相互学習、集合学習。簡単にいえば、どれもが学習ですので、学び合い、教え合いというのは一つの相互学習であって、しかも学習イコール相互学習ではないので、少し飛躍し過ぎ。学習の一形態ではあるけれども、要はその学習と教育との違いという一つの考え方は、その主体の違いであって、教育というのは提供者側から捉えた視点であり、学習というのはまさに周囲というか、住民、学習者の視点から学びを捉えると学習。それを教育ということになると、生涯教育というと、だからそういう行政とかが生涯学習施策をね。学びを豊かにするために、いろんなこういうことをしますよというのが生涯教育であって、生涯学習というのは、人々が自発的に学習をする。どちらに重きを置くのかということで、ある程度整理されているんですね、われわれの分野では。（神部委員）

- ・この小委員会でまとめようとするものが何かということについてです。ここでの環境学習のあり方というのは、行政がどう支援していくかもありますし、市民一人一人がこれからの滋賀県のために、琵琶湖のためにどう学習していくべきであるかということも含めてはいかがでしょうか。そう考えると、甚だせんえつなことをやっているわけですが、そういうことを考える場ということで、ひとまず環境学習のあり方ということで収めさせていただければというふうに思います。(井手委員長)
- ・特に学校教育を考える場合、その「つなぎ役」でどう拠点機能を維持するか。学校への支援をどうするのか。特に学校では、そういうふうなことを念頭に置きながら推進していかなければなりません。
- ・滋賀県内の環境学習拠点および用語の認知度についての項目で、「環境学習センターを知っていますか」、それからまた、「温暖化防止活動推進センターを知っていますか」、「しが学校支援センターを知っていますか」という設問に対して、「知らない」そして「知ってはいるが、利用や連携したことない」という割合は非常に高いですね。
- ・学校教育でその支援をしてもらうのに、企業さん、それからNPOさん、いろいろあるんですけども、それを知っていただかないと、なかなか学校へつながりません。
- ・それから、しが学校支援センターについて、学校現場はあることは知っています。ところが、それを活用がなかなかしにくいんですよ。なぜしにくいかというと、先生は現場で担任しています。それをしたいと思っても、それをコーディネートする人がいないから、したくてもできないんですね。
- ・せっかく支援をしていく場をつくっていながら、それをつないでいく人がいないと機能しないと思います。その役割を誰がするかということが必要かと思います。(関川委員)
- ・コーディネーターと称される方々はおられるんですが、基本的には待ちの姿勢。来ればつなぎますよ的なコーディネーターが多いわけですし、やはりそういった意味では、待ちではなくて、どうやって攻めるのかな。(井手委員長)
- ・実際、ご依頼をいただいて初めてそちらの先生方とご相談をさせていただき、行かせていただくという形式なんですね。要するに先生方も頼もうと思っても、具体的にどういうことが頼めるのかを全部分かって把握されないと、なかなか頼みづらいというがあるので、そこに一歩踏み出してもらうまでの間のつなぎをされる方がいらっしやらないということだと思っんです。
- ・逆に私たちも自らが出て行って、多くの先生方にそういうことを伝えたいのですが、行かせてもらう場がない。一校一校を回るというのはなかなかできないし、また先生方のお時間というのもありますので、何か集まって、そういうことを聞いていただける場とか、私たちのような環境団体と先生方とをつなぐ部分が整備できれば、もう少し活用していただきやすいのではないかなと思うのですが、どうでしょうか。(来田委員)
- ・第一歩のコーディネートという、そこはかなり工夫が要るのかなと(井手委員長)
- ・各学年の総合学習が何時間あるのか、あるいは、どういったテーマを使えるのかということをお聞きして、何時間使える方にはこういうプログラム、何時間使える方にはこういうプログラムという基本マニュアルみたいなものを作りました。
- ・担当の先生があまり環境に関心がないけれども、環境のことをやらなければならない。生き物のことはよく分からないけど、この学年は生き物をやらなければいけないけど、誰を呼んでいいのか分から

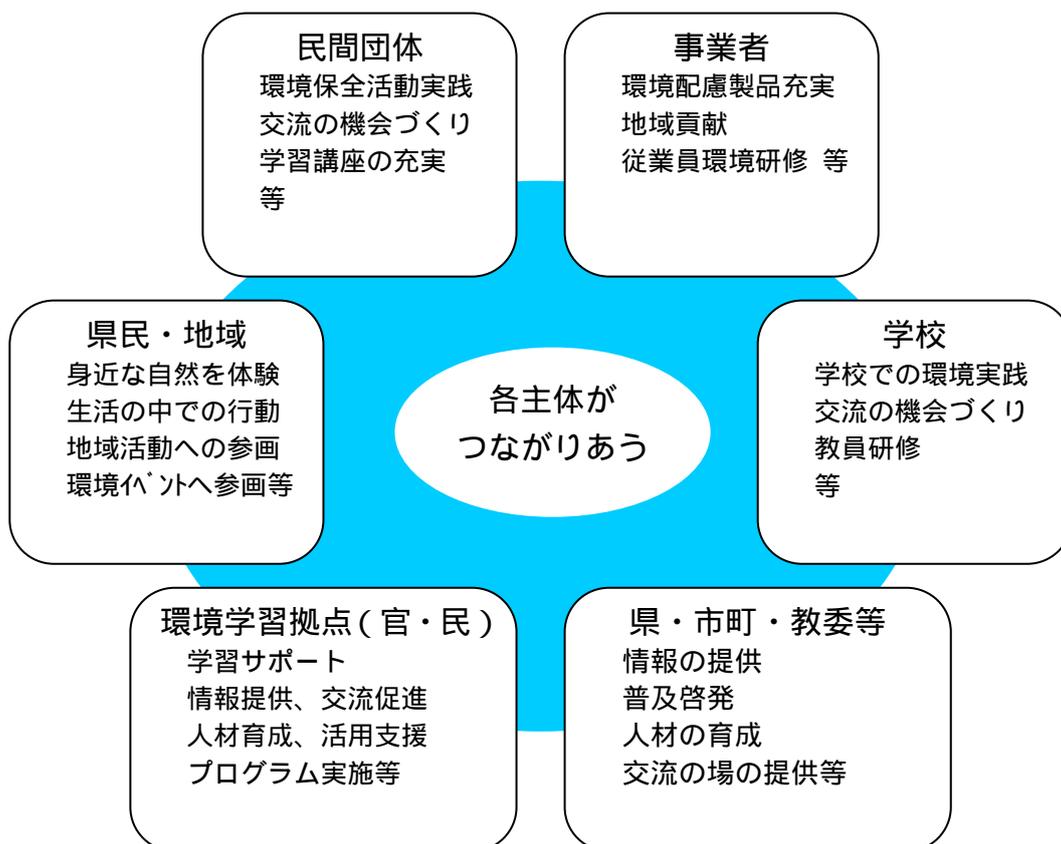
ない。そういったところを突破する上で、ある程度、最初の切り分けをしてもらえような仕組みを県と協働しながらつくっていくということも一つ、もしかしたらできるのかなというふうに関心を持って話を伺っていました。

- ・湖岸の再生とか、あるいは生き物のことという、いわゆるお年寄りが専門的な知識以上の経験とか知識というものを持っている場合があるので、今おっしゃった、ある角度から見たら、もうほんとに十分にリーダー的なことができるという人たちをもっと発掘して行って、位置付けてくことによって、今、停滞して感じられるところが突破できる点がたくさんあると思います。 (菊池委員)
- ・その地域に愛着を持っておられる方、特にこれからシニアの世代の方が増えてこれられると思うので、そういった方々にぜひ環境学習の中での位置付けとして、リーダー的な役割などを持っていていただくというのが、これからの超高齢社会などもう少し大きな観点から見ても必要な部分ではないかなと思います。
- ・今は特に環境という、男の方が多いのですが、逆に、石けん運動のときは、かなり主婦の方とか女性の方が多かったので、これからはもっと女性がそういう分野に参画してもらえような、仕組みや仕掛けをつくっていくべきではないかなと思っています。 (来田委員)
- ・仕事の関係で県内に移り住んでこられて、終の棲家として滋賀県を選ばれた、いわゆる新住民の方々も多いわけですが、そういった方々の、意識というのは、世論調査なんかのクロス集計を見ても、実は新住民系の方の意識のほうが高いのです。ぜひそういった方々の力を積極的に活用できるような仕組みというものを考えていかなければなりません。 (井手委員長)

第2回小委員会資料(検討まとめのイメージ)より

各主体の役割

具体的に誰がどうすればよいか、どう連携しあうのか



【意見】

- ・前の委員会で、環境学習やESDプログラムを進める人材不足が言われていました。学校の先生がそれを全て実施するのは不可能なので、この人材を地域の人にやってもらうことが必要かと思います。そして、滋賀県内で積極的に持続可能な社会づくりを進める市町村、地域コミュニティ、学校を環境学習拠点とし、その活動が全滋賀にいきわたるためのコーディネートを滋賀県ができればと思います。
(吉積委員)
- ・学校を環境学習拠点として、その活動が滋賀全域に行き渡るようなコーディネートを滋賀県ができればということですけども、コーディネートを誰がするかなんです。それができたら、もっとその拠点施設の思いが伝わってきて、もっと有効的に働くんではないかと思います。
(関川委員)
- ・最後の各主体の役割の中で、いろんな主体でつながることが重要かと思います。その中で、例えば、県レベルと市町村レベルでそれぞれの役割があるかと思います。その連携のやり方が、おそらく今後重要になってくるのかなと思いますので、何かレベル別に役割を示した方が分かりやすいのではないかと若干思いました。
- ・並列的に全部つながるというかたちになっていますが、考え方的にはそれでいいと思いますが、おそらくいろんな活動において、県が地域の人とつながってやる活動と、市が活動を実施して、県がコーディネートをするといったように、活動ごとによって、そういう役割分担も出てくるのかなと思います。全体的にはこのイメージでいいと思いますが、何か具体的に活動別にどういう役割で進めていくほうがいいというものがあつたほうが分かりやすいのではないかなと思いました。
(吉積委員)